

福岡藩の蘭学者青木興勝の長崎遊学と对外認識

松本英治

Study in Nagasaki by Rangaku Scholar Aoki Okikatsu from the Fukuoka Feudal Domain and His Awareness of Things Foreign

はじめに

- ①青木興勝の経歴と著作
- ②青木興勝の長崎遊学
- ③翻刻『阿蘭陀問答』
- ④『阿蘭陀問答』の検討

おわりに

【論文概要】

本稿では、福岡藩の蘭学者の嚆矢として知られる青木興勝の長崎遊学の実態を、新出土史料『阿蘭陀問答』を翻刻・紹介しながら検討し、長崎遊学の経験が興勝の对外認識にいかなる影響を与えたのかについて考察した。興勝の長崎遊学は、長崎警備を担当する福岡藩にとって世界地理や国際情勢の把握が不可欠であるという強い時務意識に基づいて行われたものであった。世界地理や国際情勢の研究のためには、海外情報の収集と分析が不可欠である。福岡藩の場合、長崎の蔵屋敷に間役を常駐させ、阿蘭陀通詞を掌握して海外情報の収集にあたらせていた。買物奉行として蔵屋敷に詰めていた興勝にとって、このような環境が自らの研究を進展させる大きな要因となつた。当時の長崎では、ロシア船来航問題が長崎警備上の課題となり、日蘭貿易はアメリカ帆船によって行われ、阿蘭陀風説書ではヨーロッパ・アジアの動乱が報じられるなど、日本をめぐる国際情勢が大きく変化していく時期である。かかる国際情勢の変

化は、興勝の对外認識に強く影響し、外国貿易の有害、「鎖国」の強化、海防の充実などといった排外的な主張を生み出した。興勝の蘭学は、純粹な自然科学の追究ではなく、長崎警備を担う福岡藩にとって必要とされた世界地理・国際情勢の研究であり、対外的危機の深まりという時務意識に基づいたものであることに大きな特徴がある。

このような特徴は、ほぼ同時期に長崎に遊学して蘭学を修業した支藩秋月藩の種痘医緒方春朔と興勝の門人安部龍平の場合にも共通する。

一般的に蘭学は医学・本草学などの自然科学部門から始まるといわれるが、福岡藩の場合、本格的な蘭学は世界地理や国際情勢の研究から始まる。このような背景には、長崎警備という軍役を幕府から課せられ、それゆえに階層を問わず対外的危機を強く意識させられた福岡藩の事情があり、ここに福岡藩における蘭学の濫觴の地域的特徴を見て取ることができる。